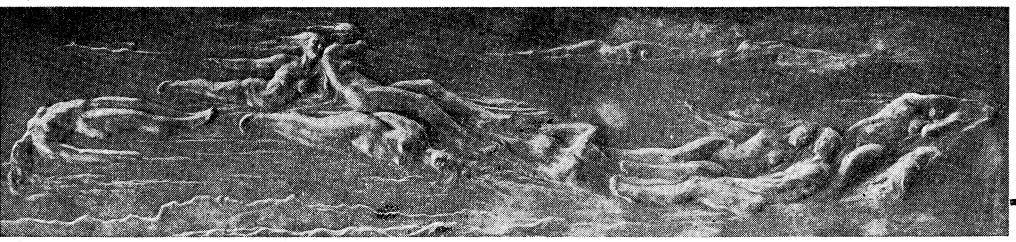
京都大学附属図書館報



静脩

1966年 8月

Vol. 3, No. 3

The Kyoto University Library Bulletin

ごあいさつ

宍戸圭一

先般の図書館商議会で，はからずも館長の要職に選挙せられ，内規に従って，総長より委嘱，7月25日付で任命の発令があった。自然科学系教授としては，本学最初の館長であるが，旧帝国大学にあっても，現在，東大，阪大，九大などに例があり，先輩の堀江前館長からも，そんな意味も含めて激励されているので，何とか責をはたしたいと思っている。

生来理科系の，実験を主とした学問をやって来ているので，図書については，門外漢とは言えないとしても，大した知識はない。しかしこの方は，先輩，同僚各位のご援助に待つことにするが，工学部の知識を生かした方面で，何か技術的に役立つ方面にも働らいて見たいと思っている。

差当っての目標は，学生諸君一般が利用する閲覧室を気持ちよくすることである。私所属の工学部工業化学教室のご好意で，飲料水冷却装置をゆずっていただくことになったのが，小さいことであるが，先ず手はじめである。目下各方面にご援助をいただくようお願いしているのは，200坪のあの部屋に冷房装置を入れることである。何分莫大な金額になることなので，困難も多いが，取敢えずの要務と考えている。

心の痕跡

桑原武夫

ジャン・ジョレスは，あらゆる本を読み，それをことごとく忘れた偉い人であった。

アランの著作のなかに，こうした言葉を見出したとき，私はおどろき，そして嬉しかった。私は小中学時代は恐らくクラスでも，一，二をあらそう読書家だった。高校に進んでからは山岳部に入り，やや戸外派に転じたので，読書の時間は減ったが，趣味は変らなかった。フランス文学で文学士になってからも，読書とは専門以外の本を読むことと心得て，濫読はやめなかった。

しかし，一方，“知行合一„ の思想が私の心のなかで次第につよまっていた。この憬れは前からあったのだが，わずかながらの登山行為とマルクス主義に動かされたジャーナリズムとの影響があったかも知れない。ともかく，書物によってえられた知識ないし知恵は人生での実践に役立って，はじめて価値があると考えたいのであった。これには人生に役立たぬ本はあまり読まなくてもよい，という含蓄があるので，怠け心に口実をあたえもし